
(令和5年9月20日掲載)

言葉は正しさより優しさ



スマイリーキクチ

タレント。1972年東京生まれ。1993年、漫才コンビ「ナイトシフト」でデビューし、翌年解散。1999年、殺人事件の犯人とネット上に書き込まれ、いわれなき誹謗中傷と闘い続けることになる。2011年、その闘いの記録をつづった著書『突然、僕は殺人犯にされた ネット中傷被害を受けた10年間』を発刊。現在は自身の体験を基にネットの危険性やいじめをテーマとした講演活動を行い、2019年に一般社団法人インターネット・ヒューマンライツ協会を立ち上げ、代表を務める。

日本ではGIGAスクール構想で小学生にタブレット端末が配布されるようになりました。ICT（情報通信技術）教育に活用される一方で、チャット機能などを悪用したネットいじめが原因で命を絶ってしまう子どももいます。情報モラルを学ばないと教材が凶器に変貌します。

SNS（交流サイト）のいじめや不適切投稿は若年層が、差別や誹謗中傷^{ひぼう}は中年層が多く、インターネットの人権侵害は増加傾向にあります。誤った情報をうのみにすれば気付かぬうちに加害者にもなります。言葉は刃物と同じで使い次第では人の命を奪う。私たちはそれぐらい危険なツールを扱っています。

1999年、インターネットの掲示板に、私が犯罪史に残る凄惨^{せいさん}な殺人事件の共犯者だというデマを書き込まれました。事実無根の情報が瞬く間に拡散されて真実のように化けてしまったのです。

デマを信じた不特定多数から殺害予告が毎日のように投稿されて、出演しているテレビ局やスポンサーにまで「殺人犯をテレビに出すな」といった抗議の電話やメール、ファクスが一日100件以上も届きました。警察に何度も相談しましたが、「そんなの気にしなければいい」「殺されたら捜査しますよ」と全く相手にしてもらえず、捜査をしてくださる刑事さんに出会うまで9年かかりました。

名誉毀損罪^{きそん}や脅迫罪で摘発されたのは19人。警察の取り調べで「正義感でやりました。私はネットのウソにだまされた被害者です。悪くありません」などと供述したそうです。国立大学の職員や教育関係者、大手企業の情報セキュリティの担当者や主婦など、大半は大人でしたが、その中には高校生も2人いました。家庭や学校では、子どもに「ネット

に悪口は書いてはいけません」と教えていますが、摘発された全員が悪口や誹謗中傷の自覚もなく「悪を成敗した、自分は正しいことをしている」と思っていました。

正義感は本来、弱い立場の人を守ることであり、誰かをつるし上げたり、匿名で言葉の集団リンチをしたりはしないでしょ。しかし、正義と暴力は紙一重。ゆがんだ正義感是人権侵害に直結します。本人は意見や正論のつもりでSNSに投稿したコメントも、それはあくまでも自分だけの価値観であって、受けた側には悪口や差別、誹謗中傷だと感じる人もいます。

SNSを見ていると「正しさ」を伝えたがる人ほど「優しさ」に欠けているように思います。自分の正しさを証明するためにネット検索している人もいます。SNSは情報よりも感情が流れていて、ユーザーは回転ずしのように目の前を通る喜怒哀楽の中から自分好みの感情を選びます。

その中で需要が高いのが怒りです。インターネットには一つの疑問に対してさまざまな結論があります。都合の良い情報だけを寄せ集めて理想の答え以外は認めない。SNSなどのコミュニティーに没頭すると偏見や差別も正論だと錯覚する恐れがあります。

価値観の違う人を責めて人を傷つけても、本人は正論だと主張して罪悪感もない。悪口で傷つく人はSNSは向いていないと言う意見もありますが、本来向いていないのは悪口や文句を書く人です。

侮辱罪が厳罰化されて言葉でも犯罪になると明確化されました。情報化社会の中で被害者や加害者にならないためのメソッドを学ぶ必要性を感じます。